

〔E類生涯学習・文化遺産教育コース 対象〕 前期

小 論 文

令和7年度  
一般選抜前期日程  
私費外国人  
帰国生

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は、表紙を入れて7ページである。開始後、確認すること。  
1ページ 表紙  
3ページ 問題文
3. 解答は、この冊子とは別の解答用紙(2枚)に記入し提出すること。
4. 問題冊子は、持ち帰ること。

以下の文章を読んで、後の問に答えよ。

博学連携—それは「博物館と学校が望ましい姿で連携・協力を図りながら子どもたちの教育を進めていこうとする取り組み」のことです。

博物館教育の歴史を見ると、明治時代前期の日本における博物館の黎明期<sup>れいめいき</sup>以来、児童生徒への実物授業の意義を一般に周知し、博物館を学校の一施設として活用する考えがありました。そして、その後も学校教育を支援する社会教育機関としての役割に期待が寄せられてきたのですが、社会の変化や時代の要請、また価値観の多様化等によって博物館における教育観も変化をたどりました。移りゆく時代の中で「ゆとりの確保」や、それに反動する「ゆとり批判」への転換とともに、「知識基盤社会(knowledge-based society)」への視点などが加わり、子どもたちのための「新しい何か」は常に、学校にとどまらず、地域の社会教育機関や地域社会そのものにも求め続けられています。

ここでは、限られた紙幅ではありますが、私が勤務する袖ヶ浦市郷土博物館(以下、袖博と記す)の「博学連携」20年を振り返り、改めて「連携」することの意味について考えてみようと思います。

## 1 袖博の「博学連携」の推移概観

袖博は、昭和 57(1982)年の開館以来、学校利用のための研究員会議を運営し、児童生徒の校外学習支援と、教職員への理解促進活動を行っていましたが、博学連携にシフトしたのは平成 8(1996)年の中央教育審議会答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」以降のことでした。新規に博学連携事業として注力したのは、教育環境の変化に対応しようとするものでしたが、もう一つの理由もありました。それは、袖博が開館 15 周年を迎えようとしていて、増改築と展示の全面リニューアルを行っていた時期でもあったので、袖博の存在をアピールし、学校や地域にとってより身近な博物館となつて、そして市民から真に必要とされる博物館へと成長させる起爆剤とするためでした。

私たちはリニューアルの準備、屋外施設の「アクアラインなるほど館」の建設、展示作業等々、怒涛<sup>どとう</sup>の日々を過ごしていましたが、学校や地域とつながった博物館となる

未来を夢見て、“いまこそ博物館の出番だ”と強く意識していたのです。

袖博の博学連携黎明期には、校外学習支援、資料貸出、アウトリーチの展開を主要なものとして位置づけてまず実践し、試行錯誤の状況を博学連携研究会議に報告し、改善のための意見を求めるというスタイルをとりました。当時の袖ヶ浦市の教育ビジョンにも位置づけての行動でしたが、博物館側からの働きかけに学校教育現場等が呼応する形であったので、「博物館のために学校が協力をしているのだ」というような頑固な理解から脱却していくには時間が必要でした。しかし、実践を重ねるごとに博学双方からの働きかけが行われる状況になっていきました。博学それぞれ、本来の目的は違うけれども互いにメリットがあるという、まさに「連携の姿」が見えてきて、多くの取り組みが実現していきました。

平成9(1997)年からの7年間は、毎年度新しいことに挑戦していました。博学連携研究会議の運営や博学連携機関紙「そではく通信」の刊行は継続できていませんが、そのほかの多くは今の博学連携に継続されています。当時、博学連携研究員となってくれた市内小中学校の教職員、教育委員会事務局内の指導主事、平成7年に創設された市内の小中学校配置された学校司書(当時の読書指導員)、そして博物館職員には、がむしゃらに取り組むことで手に入れたとしか思えないそれぞれの“プロ意識”と“仲間意識”があり、連携することで生み出される感動や達成感を共有できるようになっていたような気がします。

## 2 袖博が追い求める地域博物館像と博学連携・地域連携

袖博は「袖ヶ浦市郷土博物館の使命」を策定し、地域博物館としての基本目標や基本理念とともに使命として4項目、使命を実現するための活動目標6項目を掲げています。その活動目標の一つ「地域とのつながりを活かす—地域連携の展開」では、市民の多様な学習を支援するために調査研究や展示成果を発表し、市民が新たな価値を発見、創造できるような拠点となること、小・中・高等学校との連携により多種・多様なプログラムを開発し利用促進することで、子どもたちによりよい教育環境を提供すること、ほかの社会教育機関・博物館等とのつながりや地域の企業、NPO等との交流・連携をより強化し、地域の歴史や文化を深く理解する機会を提供する、と定めています。

そして、地域連携とともに主要事業として推進しているのが、地域学講座「袖ヶ浦学」の実践と、市民協働という理念を博物館スタイルで実践している「市民学芸員」の活動支援です。博学連携の視点に立つと、袖ヶ浦学は、郷土の歴史、行事や祭り、自然、動植物、産業等について幅広く学べるので、地域の学習素材を把握することができ、価値の分析から教材化につなげることができます。「市民学芸員」とは、自らの経験や知識を活かして博物館で活動するボランティアの方々なのですが、彼らは体験学習等で博物館にやって来る児童・生徒への解説や指導、さらには、学校へのアウトリーチ等で活躍しているので、博学連携になくはならない存在となっています。そして言うまでもなく、地域連携は、博物館活動によって形成してきた幅広い組織的・人的ネットワークによって、多彩かつ深みのある学習支援を可能にします。

博物館には、地域連携によって、新たな関係や価値の創造につなげるためのコーディネートを行いながら、子どもたちの学びをサポートしていく責任があるのですが、このコーディネートができるようになるには、経験だけではなく、高い意識が必要になります。

### 3 博物館と学校を結ぶ仕掛人

#### —コーディネーターとしての学校司書—

地域連携、特に博学連携の推進では、博学双方の事情や本音に通じる人材がコーディネーターとなることが理想なのですが、博学連携の黎明期からともに活動してくれている学校司書がその役割を果たしてくれることが多くありました。例を挙げると、この本の著者である学校司書の和田幸子氏は最初、袖ヶ浦の郵便局の待合室の一角を借りて私たちが開催していた「袖ヶ浦百年歴史展」で、太平洋戦争時のゲートルや水筒、千人針、国防婦人会のたすきなどを見て、“授業で活かしたい”と考え、袖博と相談して中学校へのアウトリーチ(出前展示と解説)を実現させました。さらには自らが市民学芸員となって活動する中で、博物館を会場にした、中学生による「私のたからもの展」の開催、市民学芸員の仲間(貨幣コレクターでもある西飯靖さん)を招いての「貨幣の歴史」の授業を展開するなど、バイタリティーあふれる行動力で博物館と学校を結んでいってくれたのです。そして、今でも折に触れて、博物館の資料と人材を活かし続けてくれています。

思えば、今の博学連携の土台づくりには多くの学校司書が関わってくれていました。“子どもたちの感動体験のために”，“よい授業とするために”，“本物の魅力やすごさを伝えるために”……。博物館資料とともに学芸員や地域人材を活用し、何ができるかを考え、さらに自ら学ぶ努力を惜しまない姿が、私たち博物館の学芸員の心を動かし、現場の教師たちの魂に火をつけたことも少なくなかったはずです。

## 4 結びに

袖博が博学連携に取り組んでから、20年以上の月日が流れ、3回目の学習指導要領の改訂が行われました。今、袖ヶ浦市内の小学校3年生と6年生は社会科の学習で、必ず袖博での体験学習を経験していますが、アウトリーチや資料貸出は以前よりも少なくなっています。中学校でもアウトリーチや資料貸出実績は減少しています。博物館でも学校でも以前に比べれば、ことごとく余裕がなくなっている気がするのですが、時代と社会の要請や価値観の変化があるのでしょうかから、改めて学校側のニーズ調査や研修などの機会を通して、博学双方の現状を共有し直すことから、新しい博学連携の姿を描いていくべきでしょう。

学校や教室を離れた子どもたちの学びの場として、驚きや感動を手にしてもらえる場として、未来につなげる地域の遺産を守る場としての博物館。その存在を認め、地域コミュニティの未来を信じ、地域の文化を担う人材を育成するために機能していく博学連携の意義は大きいはずです。地域の子どもたちを取り巻く私たちすべてが再度、相互に理解し合い信頼し合える存在となっていくことから、博学連携の充実と新展開が始められなければならないと考えます。

〔出典〕

井口崇「地域博物館の実践から「博学連携」を再考する」和田幸子『主体的な学びを支える学校図書館～小学校・中学校の授業サポート事例から～』少年写真新聞社、2020年、pp.99-102

なお、一部文章に改変を行っている。

〔問〕

あなたが「コーディネーターとしての学校司書」の立場になったと想定し、「地域とのつながりを活かす」地域博物館の展開に向けた博学連携に基づく地域学校協働活動<sup>〔注〕</sup>の企画を1,200字以内(句読点等を含む)で提案しなさい。ただし、下欄の言葉すべてを用い、使用した言葉は該当箇所すべてを□で囲むこと。

主体的・対話的で深い学びの実現	図書	実物
学芸員	歴史	地域の文化を担う人材

〔注〕

「地域学校協働活動」とは、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動です。(中略)例えば、子供たちが地域に出て行って郷土学習を行ったり、地域住民と共に地域課題を解決したり、地域の行事に参画して共に地域づくりに関わるといった活動が挙げられます。(文部科学省「学校と地域でつくる学びの未来」ホームページより引用)